

三原第二中1年 すべて手づくり 11月初舞台

160人 団結ミュージカル

三原市中之町の市立第二中の1年生160人が、11月に校内である公開研究会でミュージカル「おおきな木」を上演する。キャストはもちろんオーケストラや合唱、大道具、照明などすべてが生徒の手による舞台で初の試み。練習や準備、本番を通じて表現力や団結力の向上を目指している。

(和泉恵太)

3回目の練習があった17日、演出家林昭弘さん(66)は広島市舞台に立つキャスト約30人が安佐南区IIが振り付けを教える図書室に集まった。「おなかから、発声法などをアドバイスする」。演技指導を担当する「おおきな木」は米国の作家

全員に活躍の場 思いやりはぐくむ

シルバスタインの童話が原作。1本のリンゴの木が、1人の男の成長に合わせて実や枝、幹を与え続けるストーリーで無償の愛の尊さを描く。生徒たちは台本を手に振り付けを確認。リンゴの木を演じる吉永憲司君(13)は「せりふが多くて大変だけど、やりがいがある」と意気込む。

「出演者を輝かす」

体育館では、合唱とオーケストラの約90人が練習。教室では

「出演者だけでなく全員に活躍の場があるミュージカルは、表現力やチームワーク、仲間への思いやりをはぐくむ要素がそろっている」。発案者で本年度から赴任した竹田敏彦校長は上演の狙いをこう説明する。東広島市内の前任校で初めて取り組み「あいさつや授業の活気が大きく変わった」。第二中の初舞台にも期待を寄せる。

指導する林さんは竹田校長と親交があり、8月6日には第二中で自ら原爆劇を披露し、演劇の奥深さを紹介した。子どもたちの初舞台に

「台本に載ったせりふが、演じる生徒の心からの言葉になるようにしたい」という。

ミュージカル上演という新たな取り組みに、三原市教委も注目する。学校教育課の赤羽義憲課長は「生きる力をはぐくむ取り組み。ミュージカルに限らず、学校ごとに特色ある活動を広げることが重要だ」と強調する。



林さん(手前左から2人目)の指導で、ミュージカルのせりふを練習する生徒

段ボールを使って舞台の大道具を作る生徒

将来は住民出演も

生徒たちは夏休み中の8月初めに担当を決め、2学期から総合的な学習の時間を活用して練習や準備を続けている。本番では他校の教諭や地域住民、保護者ら約200人が見守る中で、その成果を披露する。

「学校の恒例行事として定着させたい。今後は保護者や住民にも出演を依頼し、盛り上げた」と竹田校長。ミュージカルを学校と地域をつなぐ懸け橋にもしたい考えだ。